

# 2026年のスギ・ヒノキ花粉飛散のまとめ

[報告：副会長 沖中 芳彦]

2024年の夏は、観測史上最も暑い夏となりました。その影響か、2025年のスギ花粉飛散総数は、6,267個/cm<sup>2</sup>と史上3番目の多さとなりました。2025年の夏は、史上最高の平均気温を更新しましたが、観察木の着花状態は前年以上とはならず、スギの予測総数は、平年値(3,674個/cm<sup>2</sup>)に対し3,600個/cm<sup>2</sup>程度としました。実測値は3,400個/cm<sup>2</sup>と(図1、2)、予測をわずかに下回りました。ただし、今シーズンの測定機関の平均スギ花粉総数は、図2の長門2の測定機関において、花粉飛散の最盛期に、諸事情により9日間、花粉数のカウントに参加できませんでしたので、この測定機関を除いた19機関の平均値としています。

飛散開始日は北部の3測定機関で2月13日に

定義に該当し、全ての測定機関で2月17日までに飛散開始となりました。最多飛散日は2月22日でした。スギ花粉飛散総数の最多は美祢の測定機関の7,350個/cm<sup>2</sup>、最少は、前述の理由で長門2を除くと、岩国の1,936個/cm<sup>2</sup>でした(図2)。地区別では北部が多いことは例年どおりですが、近年は西部地区で増加してきており、東部が減少傾向にあるようです。

一方ヒノキは、飛散総数は2,310個/cm<sup>2</sup>で、平年値(2,180個/cm<sup>2</sup>)をわずかに上回りました(図1、3)。飛散開始日は3月11日、最多飛散日は3月27日でした。最多飛散総数は長門の測定機関の7,145個/cm<sup>2</sup>、最少は宇部の770個/cm<sup>2</sup>でした(図3)。ヒノキも、北部地区の多さが際立っています。

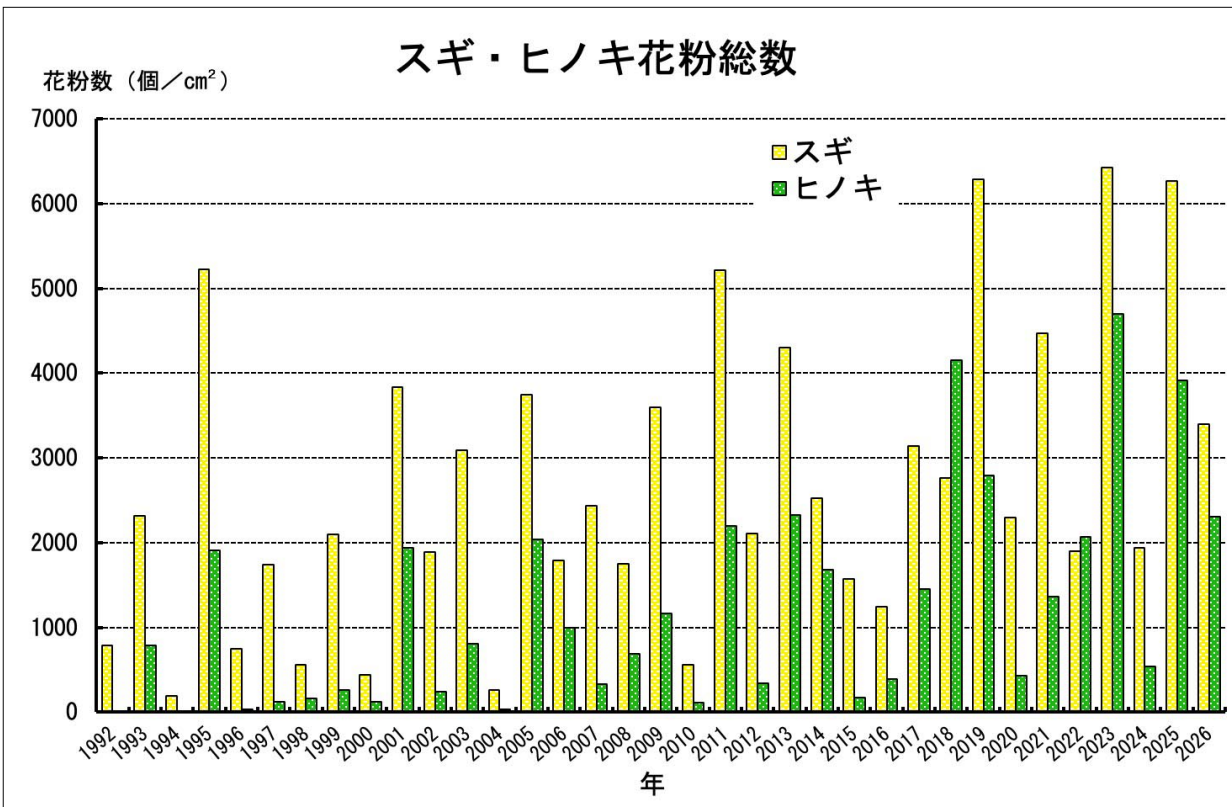


図1 年別スギ・ヒノキ花粉総数

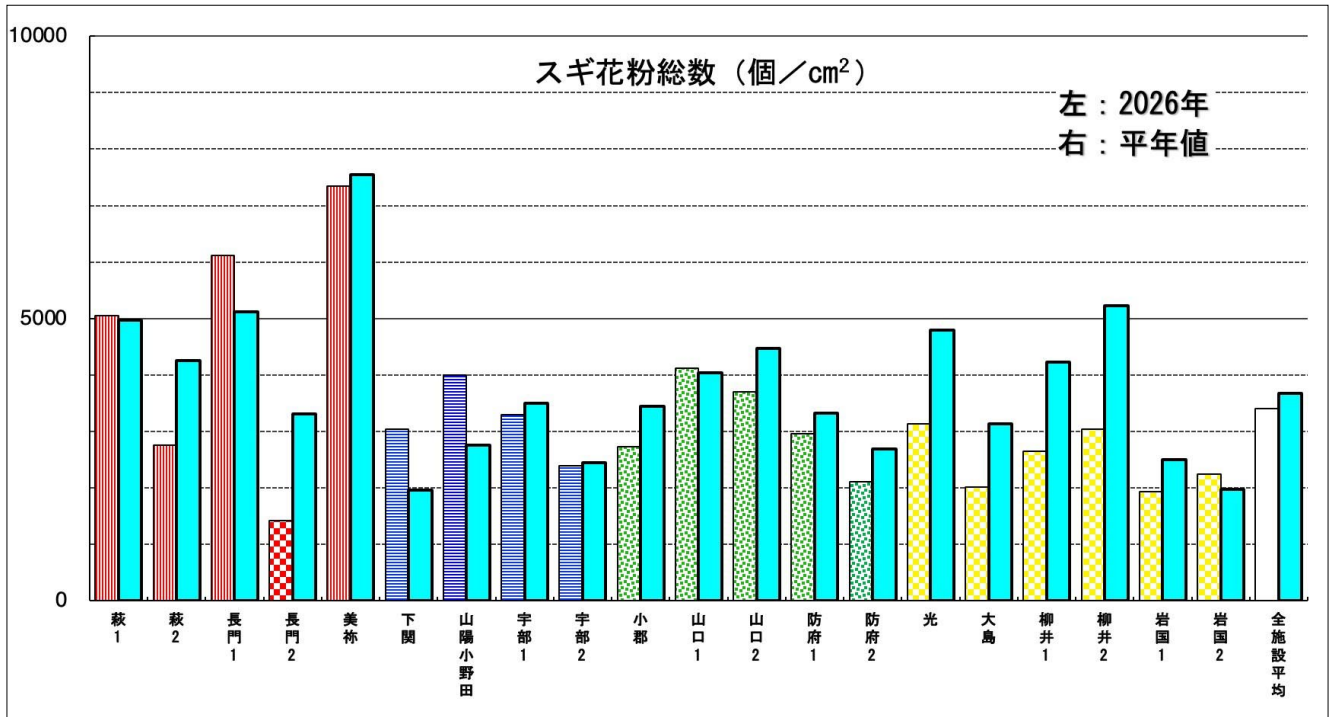


図2 2026年の測定機関別スギ花粉総数

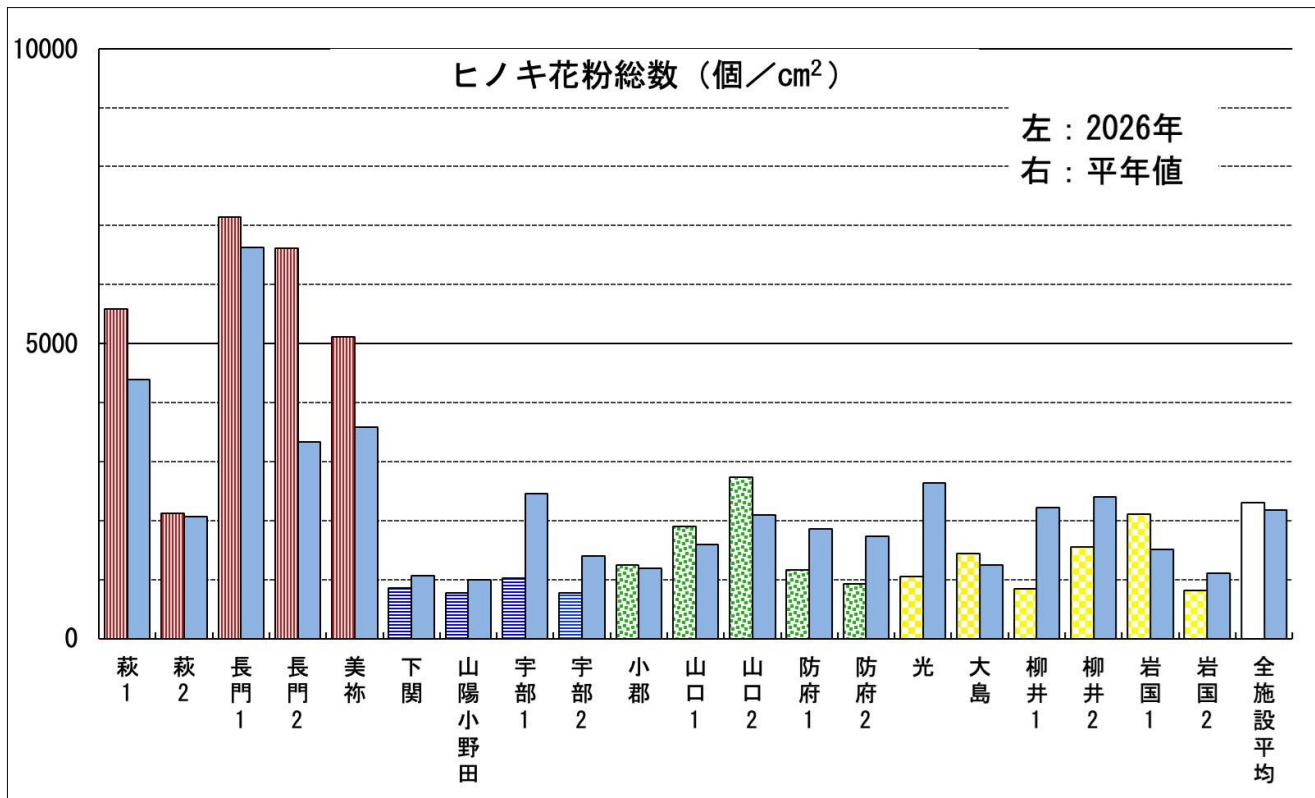


図3 2026年の測定機関別ヒノキ花粉総数

前述のように、スギの実測値は予測値にはわずかに及びませんでした。あるデータによると、今年1月の山口県の降水量は平年の約11%と、深刻な水不足が懸念されるほどの少なさでした。2月の降水量は平年並みでしたが、前半は少なく、後半が前半の約3倍の降水量で、3月は平年の約1.5倍と、スギ花粉の飛散が多い時期に降水量が多くなったことも、花粉捕集数を若干減少させる原因になったと思われます。また長門2の測定機関の値は平均値を上回ることが通常のため、シーズンを通して測定しておられれば、もう少し平均値が増加した可能性もあります。

平年値は直近10年間の平均値としています。今シーズンのスギ花粉総数は3,400個/cm<sup>2</sup>と平年値をわずかに下回りましたが、平均の計算から除かれる10年前(2016年)の花粉総数が1,240個/cm<sup>2</sup>と少ない値であったため、来シーズンを迎えるにあたってのスギ花粉総数の平年値は今シーズンの3,674個/cm<sup>2</sup>を上回る3,890個/cm<sup>2</sup>と、史上最多を更新しました(図4)。また、ヒノキの今シーズン終了時点での平年値も2,370個/cm<sup>2</sup>で史上最多です。

ところで、スギ花粉総数は、2015年、2016年と、2年連続して減少した以外は、すべて、前年より多い、少ないを繰り返しています(図1)。また、2016年と2018年以外は、平年値よりも多い、少ないを繰り返しています(図4)。この法則によりますと、来シーズンは今シーズン(3,400個/cm<sup>2</sup>)よりも多く、平年値(3,890個/cm<sup>2</sup>)よりも多いスギ花粉飛散となることとなりますが、果たしてどうなるでしょうか。

末筆になりますが、測定機関の皆様には、今シーズンも長期間にわたる花粉数のカウントを、誠にありがとうございました。引き続きよろしくお願ひ申し上げます。

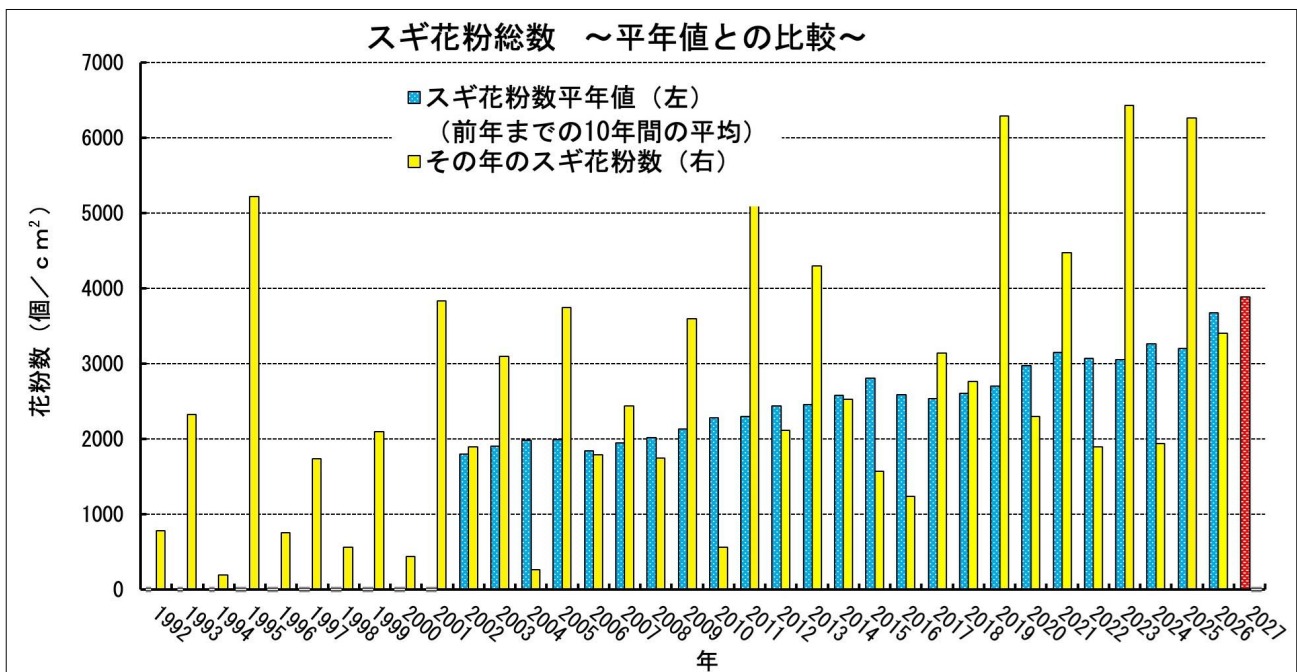


図4 年別スギ花粉総数(平年値との比較)